

床上安静に伴う腰痛に対する看護介入の検討

～泌尿器科手術後の腰痛の要因と出現時期の調査から～

3階北病棟 ○前田紹美 柳本瞳 長嶋久子 渡辺朋子 久田和子

はじめに

A病棟の泌尿器科の手術件数は、年間約500件であり、その半数が腰椎麻酔下による手術である。腰椎麻酔後は、頭痛や嘔気などの麻酔の副作用出現や、血尿予防のために翌朝まで床上安静が強いられる。そのためか術後に腰痛を訴える患者は多い。今回、腰椎麻酔下で手術を受けた患者を、性別、年齢、体重、BMI値、手術体位や術式、手術時間、安静時間別に比較し、腰痛出現との関連性と出現時期を調査した。また、現在行っている看護介入について評価した。その結果、腰椎麻酔下で手術を受けた患者の腰痛に対する看護介入について示唆することができたので報告する。

I 研究目的

腰椎麻酔下で手術を受けた患者の腰痛の要因と出現時期を明確にすることで、今後の腰痛緩和の看護を検討する。

II 研究方法

- 1 研究対象 A病棟の泌尿器科で腰椎麻酔での手術を受けた患者70名(男性46名、女性24名、平均年齢66.7歳)
- 2 研究期間 平成19年6月～平成20年9月迄
- 3 研究方法
 - 1) 腰痛チェック用紙を独自に作成し、看護師が記入した。用紙の内容は、①性別②年齢③腰痛の既往の有無と術前の腰痛スコア④体重・BMI値⑤手術体位・術式・手術時間⑥安静時間、麻酔覚醒の状態、腰痛スコア、腰痛時の看護介入とした。①から⑥はカルテより情報収集し、③腰痛の既往と術前の腰痛スコアと麻酔覚醒の状態、腰痛スコアは患者に聞き取り調査を行った。
 - 2) 術後の腰痛スコアとそれに対する看護介入について、質問紙用紙を独自に作成し術後1～2日目に配布。記入した時点で看護師が回収し、結果を単純集計した(回収率81.4%、有効回答率79.1%)。
- 4 分析方法
 χ^2 検定は①②④⑤、t検定は②④⑤を行った。

III 結果

今回の調査で70名中、腰痛を訴えた患者は39名であった(56%)。

1 腰痛の要因について

女性18名に術後腰痛が出現し、 χ^2 検定の結果、有意差(P=0.019)があった。70kg未満で腰痛を訴えたのは34名で、 χ^2 検定の結果有意差(P=0.043)があった。

2 腰痛出現時期について

術後60分以降から腰痛の訴えがあった。39名中37名が150分以降から腰痛が出現した。150分以降に麻酔覚醒した患者は43名であった。

3 腰痛時の看護介入について

看護介入の内容は、体位変換、除圧用具、鎮痛剤の使用だった。質問紙の回答から、看護介入後、39名中32名は腰痛が軽減したと答えた。

IV 考察

今回の調査から、女性と高齢者に腰痛が出現しやすいといえる。有菌らは「腰痛のメカニズムとして、組織は一定の圧を2時間以上加えていると組織内の好中球やリンパ球の浸潤を伴い皮下血流の循環障害を起こすと言われ、痛みを感じる。」と述べている。安静時間が長時間になれば、圧をかける時間は長くなるため、腰痛が出現しやすいと考える。また今回、看護介入を行ったことで、バリエーションは発生しなかったため、今後は安静時間の短縮に向けた取り組みを医師と検討していく必要がある。

腰痛の出現時期については、麻酔覚醒時期に腰痛が出現しやすい傾向にあるといえる。また、60分以降から行った看護介入で、82%が腰痛が軽減しているため、現在行っている看護介入の時期は有効であると考えられる。腰痛が増強しないように、麻酔覚醒時期から予防的に体位変換や除圧用具を使用し、患者の安楽に向けて援助を行っていく必要がある。

V 結論

- 1 腰椎麻酔下で手術を受けた患者のうち、女性と高齢者に術後腰痛を起こしやすい。
- 2 安静時間内に行った看護介入と術後バリエーション発生との関連性はなかった。
- 3 麻酔覚醒する術後60分以降からの看護介入は患者の腰痛を軽減させるために有効である。